おいしい窓

葉崎あすか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
おいしい窓

【Ｎコード】
Ｎ２１９７Ｆ

【作者名】
葉崎あすか

【あらすじ】
ぼくの部屋には窓が六つある。四方向の壁と天井、床にひとつずつ。

「ご飯よ。降りてきなさい」　下から声が聞こえた。お母さんの声だ。ぼくは、床にある窓を開けると顔を出した。

「今日のご飯はなに？」　ぼくの部屋は台所の真上にあるから、窓を開ければ、すぐにお母さんが見える。

「ハンバーグよ。あと、ポテトサラダ」　たしかに、居間の方からハンバーグの匂いがした。

「ほら、早く降りてきなさい。ハンバーグが冷めてしまうわ」お母さんがぼくを見上げながら言う。ぼくはうなずくと、窓を閉めて階段をおり、ハンバーグを食べた。ポテトサラダには、キュウリとトウモロコシが入っていた。どちらもぼくの大好物だ。

食べ終わった後は、お風呂に入って、また二階へあがる。明日は遠足だから見たいテレビも我慢する。でも、布団をしく前に、あることをしなくてはいけない。

それは、ぼくの部屋にある四つの窓を開けることだ。ぼくの部屋には窓が六つあって、一つはお母さんと話すための床にある窓。

もう一つは、今ぼくの真正面の壁にある窓で、開けると暖かい風とともに桜の花びらが部屋の中に入ってくる。その花びらは、床に落ちると、ふくらんで、まんまるになって、ピンク色の飴になる。なめると、とても甘い。

ぼくの、右手、左手、後ろの窓も開けると、海の水や紅葉、雪が入ってきて飴になる。ぼくはこれらの窓に、春、夏、秋、冬の窓と名前をつけた。味はしょっぱかったり苦かったり冷たかったりで様々だけれど、全部おいしい。ぼくは、この飴たちを明日の遠足のおやつにしようと思っているんだ。

四つの窓を開け終わると、床に散らばった飴を貯飴箱に入れた。この箱は、ぼくが学校の図工の時間に作ったもので、飴を入れるのにとても都合が良いんだ。今回は遠足に持っていくために使うけど、

いつもは食べきれない飴を保管するのに使っている。つまり、「貯金箱」じゃなくて「貯飴箱」なんだ。

飴でいっぱいになった貯飴箱を、明日もっていくリュックサックに入れた。そして、布団をしいて、部屋を暗くして寝ることにする。

だけど、なかなか眠れない。明日が遠足だからかな。

つむっている目を開くと、天井にある六つ目の窓が見えた。今まで背が足らなくて開けたことのない窓は、星を映していた。きっと、開けたら星が落ちてきて、とてもおいしい飴になるだろう。もしかしたら、床の窓と同じで、ハンバーグになるのかも。どちらも、明日の遠足に持っていけたらとても素敵だ。

ぼくは、布団から起き上がると、部屋の電気をつけた。天井の窓を見ると、もう星は見えなくて、ぼくの顔を映していた。

開けてみようか。ぼくは、軽くうなずいた。

勉強机を部屋の中央まで移動するのは大変なので、イスを持ってくるが、全然届かない。ぼくはイスを降りると、本棚へとむかい、普段使ったことのない辞書、図鑑を持ってきた。それらをイスの上に乗っけて、ぼくも乗る。届かない。あとちょっと。十センチくらい……。

……そうだ。あの貯飴箱を使おう。

ぼくは、イスから慎重に降りると、リュックサックの中から貯飴箱を取り出した。木製で丈夫な十センチメートル。

「……届いた！」　鍵に手が届き、一気に窓を開けた。途端に部屋に入ってくる、白くて丸いもの。目玉。

「うわっ。わー」　ぼくは、あまりの量に押されて、イスから転げ落ちた。貯飴箱から飛び出した飴が、目玉とともに転がる。

目玉は、床に落ちたぼくをじっと見ていた。机の下に転がった目玉も、ぼくのそばに居る目玉も、全部がぼくを見ている。

これは、遠足に持ってはいけないな。ぼくは、そう思った。

五十個くらい目玉が落ちてきた所で、今度は、口がたくさん落ちてきた。真っ赤な口が。床の上で跳ねている。これも、遠足へ持っ

てはいけない。でも、持って行ったらみんな驚くだろう。
口たちは、どうやら床に散らばった飴をなめたいようだった。でも、歯も舌も喉もなくて、ただの唇だから、くわえることしかできない。すると、口たちは飴を器用にくわえたまま、ぼくのところに跳ねてきた。
そして、キスをするように、口がぼくの口に飴を入れた。目玉はぼくを見続けている。飴は、ぼくの喉で一度止まるものの、なんとか胃におさまった。口たちは、どんどんぼくの口の中へ胃の中へ、飴を入れていく。
ぼくは、ただそれを飲み込むだけ。目玉は相変わらず。いつの間にか、春と夏と秋と冬の窓が開いていて、飴が床にたまっていった。
だんだんと、胃がふくれていくのが分かる。
音もするようになった。
丁度、ぼくが貯飴箱へ入れるときみたいな音が。
ああ、そうか……。
ぼくは、この目玉と口たちの貯飴箱だったんだ。
どうりで、床に落ちたときから身動きが取れないはずだ。
天井の窓からは、もう口は落ちてこなくて、代わりに鼻が落ちてきた。
明日の遠足、楽しみだなあ。

（後書き）

―あ　と　が　き―

こんにちは。葉崎です。

今回は、ショートショートに挑戦しました。いかがでしたか？

突然ですが、私の作品には一人称で「ぼく」が多い気がします。というか、ほとんどがそうです。「わたし」も何個かあったような気がしますが、「ぼく」が多いですね。ちなみに作者は女です。

何が言いたいかっていいますと、明日は、三人称です。

そうぞ、お楽しみに。

では、また明日。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2197f/

おいしい窓

2011年1月8日22時48分発行